

家族問題研究会1995年度シンポジウム

家族問題研究会の1995年度シンポジウムは、6月3日(土)午後、東洋大学白山校舎新2号館16階大会議室において開催された。シンポジウムのテーマは、『「主観的家族像」をめぐって』と題され、3名のシンポジストによる報告と討論が行われた。人口問題研究所からは、西岡八郎(報告者)、高橋重郷、中野英子、渡邊吉利および堀内真弓(リサーチ・レジデント)の5名が参加した。

報告テーマである「主観的家族像」とは、家族理論において家族定義あるいは家族概念として扱われていた「家族とは何か」という問いかけに対する現代的なアプローチの1つであり、従来の学者・研究者による先験的・概念的な家族把握に対して、個々の家族成員の認識・意識の側から新たに経験的に家族をとらえ直そうとする試みと言える。そうしたアプローチが提唱される背景には、人口学や人類学あるいは家族史などの諸学問分野における家族の歴史的・空間的相対性の認識の広がり、および、現代家族の従来の家族からの形態・機能の少なからぬ変貌の認知などがある。

シンポジウムでは、(1)人口問題研究所の「全国家族動向調査」を用いた西岡八郎・才津芳昭による有配偶女子の家族認識の範囲に関する報告、(2)家族認識の範囲が状況によってどのように変化し、その認識の範囲を左右し得る条件が何であるかを考察した木戸功(早稲田大学)の報告、(3)中国山東省の調査に基づく中国民衆レベルにおける「一家子」という言葉でとらえた家族把握の一義的な透徹性と状況による多義性との関連をめぐる木下英司(早稲田大学)の報告の3報告がなされ、以上の報告をめぐり活発な討論がなされた。

こうした主観的な家族把握が、従来の家族概念や家族定義ではとらえられない側面をどれだけ補ない、さらに具体的な成果を生み出すかは、まだ、今後に残された課題であるが、家族理論における新たなチャレンジとして積極的に評価されるべきである。

(渡邊吉利記)

比較家族史学会第26回研究大会

比較家族史学会第26回研究大会は、6月10日(土)、11日(日)の両日、横浜市の神奈川大学において開催された。人口問題研究所からは、廣嶋清志、小島宏、西岡八郎の各技官が参加した。

テーマ「家族のオートノミー—家族・社会・国家—」をめぐって、「日本社会における隠居慣行と家」(網野善彦、神奈川大学)の特別報告が行われたほか、フランスの「家族のレギュレーション」(丸山茂、神奈川大)、「「ハウス」イディオムの展開—オーストリア農村調査から」(森明子、国立民族学博物館)、「19世紀ドイツ人の移民と家族の諸相」(的場明弘、神奈川大学)、「ミクロストーリーと家族戦略—イタリア移民史の研究の視点から」(北村晁夫、三重大学)、「家族と社会及び国家—周辺社会から考える」(清水昭俊、国立民族学博物館)、「家と村の歴史的諸相—有賀喜左衛門の「家」論を手がかりに」(沼田誠、駿河台大学)(以上10日)、「家族戦略と家族政策—母親の就業状態と保育方法をめぐって」(小島宏、人口問題研究所)、「象徴支配と農民—「結婚難」の社会的背景」(須田文明、農業総合研究所)、「家族料理のイデオロギー」(佐藤健二、東京大学)の9つのそれぞれ興味ある報告が行われた。これらの報告に関する討論は、11日の午後、シンポジウム「家族のオートノミー」で行われた。討論は、人口移動、移民と家族戦略あるいは家族分析の方法論を中心に議論を進めたいという意向が議長によって示され、当初それについて議論が進んだが、その後、網野教授の提起した「農民」の定義の問題について白熱した議論が展開され終了した。

(廣嶋清志記)